

青年期に入る愛着障害圏の生徒の自己評価と他者評価

—対人関係特性と自己イメージの検討から—

14006PCM 中西 維

I. 問題

1. 児童虐待と愛着障害

虐待を受けた子どもたちは、DSM-IV-TR・IDC-10 においては、反応性愛着障害として捉えることができる。DSM-5 ではこのうち、抑制型のもののみを反応性愛着障害とし、脱抑制型対人交流障害と区別することになっている。このいずれもが、背景に虐待的体験を抱える子どもの対人関係の特徴を示すものである。

2. 愛着障害の子ども自己評価と他者評価

子ども自身が評定する YSR (Youth Self Report) と職員ないし養育者が評定する CBCL/4-18 (Child Behavior Checklist/4-18) は、Achenbach (1991) が両者を比較することを目的に開発した子どもの情緒や行動の問題を評価するシステムである。市川・後藤 (2014) は、職員 2 名の評定 (CBCL) と子ども自身の評定 (YSR) との相関について調べた。その結果 2 人の職員ともに子ども自身の評定と無相関であった。川戸・後藤 (2015) では、自己評価 (YSR) と他者評価 (CBCL) のズレを子ども自身の自己イメージを切り口として思春期を対象に考察している。

3. 自己評価と他者評価のズレの背景要因

ズレの背景要因として対象児たちは、自分の感情や湧き起ってくる情動がどのようなものなのか、どう表現すればよいのか、上手くつかめていないことが推測された。つまり、自己イメージが未成立であることが示唆されている。

4. 愛着障害の青年期課題

愛着障害児の自己イメージの未成立が、「自分とは何か」というアイデンティティの確立が課題に挙げられる青年期ではどう影響するのか。

II. 目的

本研究では、①自己イメージと他者イメージの比較、②自己表出の仕方が結果的にどのよう

に他者に映って見えるか、③心理検査から見る実際の内面、④上記の 3 つから、退所を控え進路を考える青年期の葛藤や課題を検討する。これは自立支援をしていく中でどうアプローチしていけば良いか、自立後の社会参加において重要になるのではないかと考えられる。

III. 方法

現在 A 児童養護施設に入所中の高校 2 年～3 年の男子生徒 3 名を対象に自画像、樹木画テスト、YSR、ロールシャッハ・テストを 2 日間にわたり個別に実施した。3 名の生徒の施設担当職員それぞれに CBCL を配布・回収した。

IV. 事例

1. 事例 1: 仮名 A (男子, 18 歳, 高校 3 年生)

A の YSR (自己評価) と CBCL (他者評価) では、全体的にグラフは一致しているが自己評価の方が他者評価より高い。本人は身体的訴えをしているが担当職員には届いていないようである。また、攻撃的行動では担当職員は問題としていないのに対し本人は問題としている。A の体験内容として身体イメージの希薄化、消失感がある。身体の消失感は情緒性の拡散につながる。バラバラ感の強い自己を隠したり、他の人と違う見方をしているという感覚があるため相手に合わせるような、普通の見方をしようとしたりしているところが職員の評価では「良い子」になり問題行動がないとされる。しかし本人としてはそのバラバラになりそうな自分を隠しているだけで問題があると認識している。その結果が YSR と CBCL のズレに表れていると考えられる。

2. 事例 2: 仮名 B (男子, 17 歳, 高校 2 年生)

B の YSR (自己評価) と CBCL (他者評価) では、本人は問題を認識していないが担当職員は問題を認識している。B は自分の存在を小さく感じている。そのため自分を強く見せたいと

思っている。そこが他人には問題行動があるとされる。強く見せたいと思うが、上手く見せられず嫌になり、自己存在感の希薄化を体験している。そのため仮面を被ろうとするが上手くいかない。どんな自分を演ずればいいのかということに意識が集中していてそれに気を取られているため本人は問題を認識していない。

3. 事例3: 仮名C (男子, 17歳, 高校2年生)

CのYSR(自己評価)とCBCL(他者評価)では、全体として本人は問題行動を認識しているのに対し担当職員は問題行動と認識していない。Cは崩れやすい自己イメージを持っている。身体感覚の薄さ、離人体験の自覚があるため周りには見せないように努力していると考えられる。その結果、周りには見えていないが、本人は問題を認識している。

V. 考察

1. 愛着障害圏の子の青年期

3事例を検討した結果、事例1と事例2はスキゾイド・パーソナリティ障害の要素が強く、事例3はパーソナリティ障害圏の病理を基盤に解離性障害への移行が懸念された。発達早期からの愛着障害は、青年期にいたりこうした重篤な精神障害へと発展する可能性が高いということが出来る。

2. 社会参加不安について

社会参加不安を抱える以前に、自己イメージの構築が主たる発達上の課題となっており、周囲からの社会参加、自立の圧力のみが増大するという状況に置かれることによるものと思われた。彼らは社会参加について、やっていけると感じているようだが自己イメージが構築できていないと社会参加に伴って病理が深くなる危険性がある。

3. 青年期までに達成しておきたい心の課題

① 自己の居場所感の確保

自分らしくいられるためには本来の自分を受け入れてもらえるという場所が必要なのではないだろうか。村瀬(2012)は、「個人は限りなく“他ならないこの私”という感覚を保障され、護られてこそ安堵し、自尊心を保ちうる」と述べている。また、その人が何をどのように、ど

こから着手するような援助を必要としているのかを理解して、自立性を脅かさないようにそっとより添い手助けしていくことが求められるとも述べている(村瀬, 2012)。本来の自分を受け入れてもらえるという安心感は、自分がここにいて良いのだという居場所感へ繋がるのではないだろうか。愛着障害圏の彼らにとって人から自分を尊重され大切にされるという経験は自分大切にされる存在だと気づき自分を大切にしようという思いへ繋がるのではないだろうか。

② 身体性と情緒性の確保

身体を自分の意志で生きるということにはまず、自己を知ることが必要であろう。これは上で述べたように、第一歩として自分を大切にし、自分の気持ちに気づくことである。その時により添い見守る人が必要であろう。それは、「知性化された自己理解は人格や現実の行動変容へと普遍化して活かされにくいばかりか、かえって自己弁護、防衛の手段となり、成長進歩をはばむことすらある(村瀬, 2012)」とあるように本人の目だけでは本来の自己を見落とす危険があるからだ。本当の自分に気がついた時に自分の意志で自分の身体を動かすという感覚が戻ってくるのではないだろうか。この“自分”に気づいた時、本当に自分がやりたいことなりたいものがみえてくるであろう。しかし、その時なりたい自分となり得る自分の分化と自覚が必要である。それは自己評価、他者評価の違いでもあるように本人が思っている自分と自分の行動によって人から見られる自分を知っておくべきである。なり得る自分を知る為には自身の自覚が必要である。なり得る自分を知る為にも周囲からの伝え返しが必要と考える。そのためには、どんな自分を出しても受け入れられる、という安全な場所の確保と彼らの自己表現が必要ではないだろうか。

4. まとめ

自己評価と他者評価のズレの背景には、対象事例における自己イメージの拡散と混乱による未成立という状態があった。生活者としての自己を育てるという視点に立つての支援が重要である。